

『和漢朗詠集』の書写と装丁

一、はじめに

平安期に書写された『和漢朗詠集』諸本は、粘葉本や伊予切・関戸本・雲紙本・安宅切・益田本（正式名称、所蔵などは後述する）などをはじめ、華麗な装飾料紙を用いて書写される。粘葉本・関戸本以外では卷子本に仕立てられ、書写に際しても、漢詩を楷書や行書で書くなど変化をつけている。

鎌倉時代に書写された諸本のなかにも、雲紙や金銀箔散らしの料紙を用いたもの、卷子装のもの、伝世尊寺行能筆本（逸翁美術館蔵）などのように楷書や行書を取り混ぜ、変化に富んだ書写が行われているものが多く現存する。

これらの写本は調度品として写されたものであり、料紙や装丁だけでなく、表記にもこだわるのも当然のことである。しか

し、卷子本に仕立てる理由を調度品であるというだけでは説明しきれない。

平安時代末に藤原基俊が書写した多賀切は卷子本ではあるが、墨の界線を引いた素紙が用いられ、詳細な詩題を書き加えるなど、研究的な書写態度が見られる。鎌倉期以後の写本でも卷子に仕立てられたものが多く伝わるが、これらは調度品として作成されたものとは言いがたく、見た目のための装丁とは言えない。

本稿では写本の形式の点から『和漢朗詠集』がどのように享受されてきたのかを考察する。

恵 阪 友 紀 子

二、『和漢朗詠集』諸本

まずは、『和漢朗詠集』の伝本を確認しておく。次に掲出した諸本一覧は、おもに国文学研究資料館の若手共同研究で調査した伝本であり、その研究成果である校本を利用したものである。¹⁾『和漢朗詠集』伝本のうち、完本またはそれに近い形で現存するもので、平安～南北朝ごろまでに書写されたものを中心に扱った。また、現在は裁断され、断簡になっているものでも、影印などでおおよその全容が確認できるものや主な古筆切、一部は江戸期の写本をも加えた。なお、諸本略称に※を付したものは、あとの諸本異同には取り上げていない。通し番号のあとに、諸本略称（所蔵先と諸本名称）（書写年代）装丁・料紙の装飾を順に掲げる。

《平安時代書写》

- 1 粘葉本（三の丸尚蔵館蔵伝藤原行成筆粘葉本）
粘葉装・唐紙
- 2 伊予切（伝藤原行成筆伊予切）・粘葉装・飛雲
- 3 近衛本（陽明文庫蔵近衛本倭漢抄）（一一世紀）
卷子装・唐紙
- 4 関戸本（伝藤原行成筆関戸本）（一一世紀）

卷子装・染紙

- 5 雲紙本（三の丸尚蔵館蔵伝藤原行成筆雲紙本）
（一一世紀）卷子装・雲紙
- 6 公任筆本（三の丸尚蔵館蔵伝藤原公任筆卷子本）
卷子装・唐紙など
- 7 益田本（東京国立博物館蔵益田本）（一一世紀）
卷子装・染紙、飛雲など
- 8 行成砂子切※（伝藤原行成筆金銀砂子切）
（一一世紀後半）・卷子装・金銀砂子
- 9 公任唐紙本切※（伝藤原公任筆唐紙本朗詠集切）
（一一世紀後半）卷子装・唐紙
- 10 太田切※（伝藤原公任筆太田切）卷子装・唐紙
- 11 大内切※（伝藤原公任筆大内切）卷子装・唐紙
- 12 下絵朗詠集切※（伝藤原公任筆下絵朗詠集切）
卷子装・金銀砂子、下絵
- 13 多賀切※（多賀切）（一一一六年）卷子装・素紙
- 14 葦手絵本（京都国立博物館蔵世尊寺伊行筆和漢朗詠抄）
（一二六〇年）卷子装・葦手絵
- 15 戊辰切（戊辰切）（一二世紀）卷子装・
金銀箔、砂子

16 安宅切※（伝藤原行成筆安宅切）（一二世紀）

卷子装・金銀砂子など

17 久松切（伝藤原行成筆久松切、下巻出光美術館蔵）

（一二世紀） 卷子装・砂子、飛雲

18 山城切（伝藤原定頼筆山城切）（一二世紀）

粘葉装・素紙

19 平等院切※（伝源頼政筆平等院切）（一二世紀）

卷子装・雲紙

20 寂然本※（尊経閣文庫蔵伝寂然筆本）

平安末―鎌倉初・粘葉装（栴型）・雲母引、銀砂子

先にも述べた通り、平安時代に書写された写本は装飾料紙を用いた卷子本が多い。現存するものでは粘葉本・山城切・寂然本以外は卷子本である。料紙の装飾も多種多様で、素紙は多賀切と山城切のみで、大字切・法輪寺切・太田切・下絵朗詠集切などの古筆切には装飾料紙を用いた卷子本が多い。

特に公任筆本は、装飾料紙を用いるだけでなく、多くの諸本では上下巻それぞれの巻頭に置かれる目録が付されず、本文中にも詩題や作者が一切書かれていない。和歌も草仮名や万葉仮名、宣命書にするなど変化を付けたもので、本文を正確に伝え

るというよりは、調度品としての見た目を重視したものである。

しかし、平安時代書写の諸本も調度品としての華麗さだけがあるのではない。粘葉本・伊予切・久松切・戊辰切などでは、墨や朱の調点や声点などが付され、本文が読まれてきたことがわかる。戊辰切や行成砂子切では、調点などの他に天地に墨界が引かれているが、調度品としては墨の界線や調点類は無粋に感じられる。

界線のある写本としては、平安後期に書写された山城切があり、素紙を用いた綴葉装冊子本であるが、天地だけではなく行間にも押界が押されている。ほかにもよく知られたものでは多賀切がある。現在は断簡しか伝わらないが、もと素紙の卷子本で、陽明文庫に奥書部分が伝わり、「永久四年（一一一六）に藤原基俊眼点了、愚隻基俊」とあり、永久四年（一一一六）に藤原基俊が書写したことが明らかな写本である。多賀切は天地と行間に界線が引かれ、朱や墨の調点や読み仮名などが記され、詩題注記も詳細に書き込まれている。

以上のように、平安時代の写本は装飾料紙を用いた美麗なものも多く、漢詩や和歌の表記の多彩さは見た目の美しさ、文字の鑑賞に重点を置いたものと考えられる。その一方、時代が下るにつれて界線が引かれ、詩題が詳細に記されるようになり、

読むための訓点などが加えられるようになっていく。

次に鎌倉時代に書写されたものを挙げる。

《鎌倉時代書写》

21 嵯峨切（伝後京極良経筆嵯峨切）卷子装・素紙

22 正安本（正安二年奥書本）卷子装・素紙

23 建長本（専修大学蔵建長三年本）（一二五一年）綴葉装・素紙

24 生田本（関西大学図書館蔵生田文庫本）

卷子装・素紙

25 書陵部為家為定本（書陵部蔵伝冷泉為秀為定筆本）

（上巻・鎌倉、下巻・南北朝）卷子装・素紙

26 逸翁零本（逸翁美術館蔵卷子零本）卷子装・素紙

27 逸翁行成本（逸翁美術館蔵伝藤原行成筆本）

卷子装・素紙

28 逸翁伊房本（逸翁美術館蔵伝世尊寺伊房筆本）

卷子装・素紙

29 今治寂蓮本（今治市河野美術館蔵伝寂蓮筆本）

卷子装・雲紙

30 東大良経本（東京大学国語研究室蔵伝後京極良経筆本）

綴葉装・素紙

31 墨流本（伝世尊寺行能筆墨流本）卷子装・墨流し

32 逸翁行能本（逸翁美術館蔵伝世尊寺行能筆本）

卷子装・素紙

33 京女行能本（京都女子大学蔵伝世尊寺行能筆本）

卷子装・素紙

34 歷博伏見院本※（国立歴史民俗博物館蔵伝伏見院宸筆本）

卷子装・紫雲紙

35 冷泉家本（冷泉家時雨亭文庫蔵本）（一二二八年）

枳型綴葉装・素紙

36 東大永仁本（東京大学国語研究室蔵永仁五年書写本）

（一二九七年）卷子装・素紙

37 家隆本（九州国立博物館蔵伝藤原家隆筆本）

（一二三世紀）卷子装・素紙

38 嘉元本（国文学研究資料館蔵嘉元三年書写本）

（一二三〇五）卷子装・素紙

39 関大行尹本（関西大学図書館蔵伝世尊寺行尹筆本）

折本（もと卷子装）・素紙

40 兼好本（東北大学三春秋田文庫蔵伝兼好筆本）

卷子装・素紙

41 淨弁本（陽明文庫藏伝淨弁筆本）

鎌倉後期～南北朝・卷子装・素紙

42 逸翁為秀本（逸翁美術館藏伝冷泉為秀筆）

鎌倉後期～室町前期・卷子装・素紙

43 行忠本（今治市河野美術館藏伝世尊寺行忠筆本）

鎌倉末～南北朝・卷子装・素紙

鎌倉時代に書写された写本は、今治寂蓮本（雲紙）や墨流本のように装飾料紙を用いたものも存在するが、素紙が多くなる。ただし、今回取り上げていない古筆切の中には箔散らしや雲紙を用いたものも少なくない。装丁については、建長本や冷泉家本などのように綴葉装冊子本も見られるが、やはり卷子本が多い。

『和漢朗詠集』の諸本では詩歌の下に脚注のような形で詩題や作者が書き込まれる。嵯峨本・建長本・正安本・生田本など、大江匡房の注が書き入れられた、いわゆる朗詠江注系の伝本を中心に、作者や詩題歌題注記が詳細に付される。一方、逸翁行成本や京女行能筆本などでは、詩題があまり記されず、作者のみが書かれ、墨流本や逸翁行能筆本などでは作者・詩題ともに一切記されないものもある。

詳細な詩題注記を持つ写本では、読み仮名や訓点・ヲコト点などが多く記される。とくに一つの語に対して複数の読みが記されるなど、本文をいかに読むかという点に重点が置かれているようになる。詩題注記の詳細化、複数の訓点や読みを漏らさずに記すといった研究的態度がうかがえる。

《南北朝・室町時代の写本》

44 後醍醐天皇本（陽明文庫藏伝後醍醐天皇筆本）

（一二一九年）折本（もと卷子装）・素紙

45 歴博寛源本（国立歴史民俗博物館藏伝寛源筆本）

（一二三〇年）卷子装・素紙

46 東大良超本（東京大学国語研究室藏伝良超筆本）

（一二三二年）粘葉装・素紙

47 龍門文庫本（阪本龍門文庫藏本）（一二三七年）

冊子本・素紙

48 鳳来寺本（鳳来寺旧藏藤原師英筆本）（一二三九）

卷子装・素紙

49 長通本（今治市河野美術館藏久我長通筆本）

（一二四四年）綴葉装・素紙

50 貞和本（天理大学附属天理図書館藏貞和本）

(一三四七年) 卷子装・素紙

51 史料尊円本 (東京大学史料編纂所蔵伝尊円親王筆本)

折本 (もと卷子装)・金銀箔

52 東大国文本 (東京大学国文学研究室蔵本)

綴葉装・素紙

53 逸翁為親本 (逸翁美術館蔵伝二条為親筆本)

卷子装・素紙

54 為重本 (名古屋市蓬左文庫蔵伝二条為重筆本)

綴葉装・素紙

55 伏見宮本 (書陵部蔵伏見宮本、「調子品秘曲譜」の裏書)

卷子装・素紙

56 書陵部室町写本 (書陵部蔵室町写本)

卷子装 (もと冊子本)・素紙

57 今治紹巴本 (今治市河野美術館蔵伝紹巴筆本)

卷子装 (もと冊子本)・素紙

58 義輝本 (国文学研究資料館蔵伝足利義輝筆本)

綴葉装・素紙

59 遠忠本 (國學院大學蔵伝十市遠忠筆本)

綴葉装・素紙

60 寛恕本 (東北大学三春秋田文庫蔵伝寛恕法親王筆本)

綴葉装・素紙

61 宗鑑本 (名古屋市蓬左文庫蔵伝山崎宗鑑筆本)

綴葉装・素紙

南北朝以降の写本で完本の形で現存するものでは裝飾料紙を用いたものはほとんど見られないが、古筆切では雲母引きや金泥下絵、雲紙などが見受けられる。また、綴葉装冊子本で伝わるものが多くなってくるが、それでも卷子本に仕立てられている状況は鎌倉時代のものと同じである。

《江戸時代》

62 龍山本※ (陽明文庫蔵近衛龍山筆本)

卷子装・素紙

63 書陵部天和本 (書陵部蔵天和書写本)

(一六八一年) 綴葉装・素紙

64 長親本 (国立国会図書館蔵菅原長親校本)

(一八一四年) 袋綴本・素紙

江戸時代の写本では冊子本が多くなるが、それでも卷子本が見られる。今回取り上げたものではないが、染紙や金銀泥下絵

の装飾料紙に一部を抜き書きにして卷子に仕立てたものも見られる。

三、諸本の形態

『和漢朗詠集』の諸本は書写年代を問わず、卷子装のものが多いことは前章で確認した通りである。平安書写のものは装飾料紙を用いた調度品であり、卷子本であることも頷けるが、平安書写の多賀切を始め、鎌倉期以降の写本では素紙の卷子本が多く、調度品であるからというだけでは卷子に仕立てられた理由を説明できない。

『和漢朗詠集』以上に写本が伝わり、収載される歌数もそれほど変わらない『古今集』の場合、高野切や伝藤原公任筆本など、平安時代書写のものとしては装飾料紙や卷子本に書写されたものもあるが、鎌倉期以降のものはほとんどが綴葉装などの冊子本である。『古今集』と比較しても卷子本に仕立てられる点は本集の特徴の一つと言えるだろう。

卷子本といえ、調度品のほかに注釈書や秘伝書、また漢籍などが挙げられる。

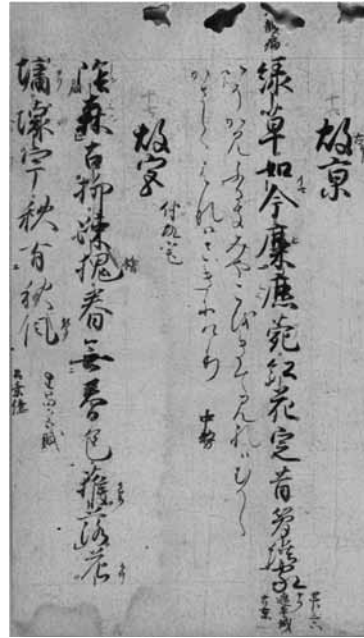
注釈書という点でいえば、朗詠江注があるが、江注の書き込

みを持つ諸本では23建長本・64長親本が冊子本である以外は、21嵯峨切・22正安本・24関大生田本・25書陵部為家為定本・39関大行尹本・42逸翁為秀本・48鳳来寺旧藏本・50貞和本が卷子本である。冊子本では行間にしか書き込みはできないが、卷子本であれば裏に注を書くことができる。22正安本や24関大生田本には江注以外の詳細な書き入れ注が裏書きとして書き込まれている。

經典や『白氏文集』などの漢籍類も卷子本であることが多いが、和歌が並記される『和漢朗詠集』は漢籍とは言い難い。しかし、写本の書写形式の変遷を考えてみたい。

漢詩は七言詩二句が一行に、和歌は一首二行書されることが多い。平安書写のものでは、漢詩一行と和歌一行が同じ幅で書写されている。鎌倉以後の写本では次第に和歌が詰めて書かれるようになり、【図二】関大行尹本のように、漢詩一行の幅に和歌一首を二行書で詰めて書かれることが多くなる。

【図一】関大行尹本・下巻・故京



さらに、書陵部蔵桂宮本（上巻零本・桂二二〇三）では次のように書写される。

鹿

いまこんとたれたのめけんあきのよを……
きりくすいたくなきそ秋のよの……

青苔路滑僧帰寺紅葉声乾鹿在林 温庭筠

暗遣食苹身色變更随加草德風来 紀

露

もみぢせぬときはの山にすむしかは……
ゆふづくよをくらのやまになくしかの……

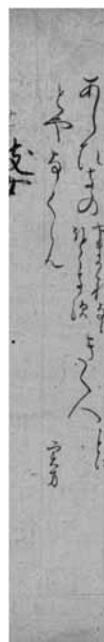
このように、和歌は本文としてではなく、項目名の下に注記のように細字で書かれたものもある。

『和漢朗詠集』の注釈であり、漢文体で書かれた『和漢朗詠

集私注』では和歌に注が施されないなど、和歌と漢詩で扱いが異なる。

書写の形式だけでなく、書写態度にも和歌と漢詩では違いが見られる例がある。

【図二】関大行尹本・下巻王昭君・七〇四番歌



例えば、関大行尹本では【図二】のように、粘葉本では「あしひきの山隠れなるほととぎす聞く人もなきねをのみぞ鳴く」とある歌が、第二―三句と第四句の「ことに」をそれぞれ割書にする。この形では「あしひきの（やまかくれなる／ほととぎす）きく人（ことに）とやなくらん」と明らかに意味が通じず、字数も足りない。このように、他にも和歌の字数が足りない箇所が数カ所見られるが、そのいずれの箇所でも訂正や加筆はされていない。漢詩の場合、前掲【図一】に挙げたように、「故宮付故宅」の一行目（後から二行目）の第六文字目「槐」の右横に「檜」、二行目の本文最後「秋風」の「風」の右に「声」と

書き入れるなど、異本注記や異本や訂正などが細かく書き込まれている。

同様の例は他本でも見られる。59 遠忠本⁽²⁾もやはり字数が足りない歌がある。下巻・懷旧・七四九番歌は「世の中にあらましかばと思ふ人なきはおほくもなりにけるかな」とあるべきところ、「よの中あらまほ／なきはおほくもなりにけるかな」と、上の句が「あらまほ」以下空白になっている。

遠忠本はほかに、下巻・老人・七三二番歌でも、「増鏡 ことになるかげに むかひみて みるときにこそ 知らぬ翁に あふ心地すれ」とあるところ、第四句の「みるときにこそ」を書き落とす。

七三二番歌の例は書陵部室町写本、書陵部天和本にも見られるが、この三本が共通した親本から派生したとは考え難い。おそらく、この歌が旋頭歌であること、「みるときにこそ」が抜け落ちても意味が通じることから、書き落としに気づかなかった可能性はある。だが、先の七四九番歌では明らかに字数が足りないにも関わらず、書き入れなどの訂正はされない。遠忠本の場合も、漢詩には異本書き入れや訂正があるため、校合されたものであるが、和歌本文については注意が払われていない。

また、26 逸翁零本では、下巻・無常の七九六番歌「手に結ぶ

水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ」七九七番歌「末の露もとの滴や世の中の遅れ先立つためしなるらん」とあるところ、「手に結ぶ水にやどれる月影の遅れ先立つためしなるらん」とあり、七九六番歌の上の句と七九七番歌の下句が混在してしまっている。なお、逸翁零本ではこの混在歌の次に七九七番歌が書写されている。

ここまであからさまな例ではないが、一字二字の脱落はさまざまな写本で見受けられるが、訂正されることは多くない。

このように、漢詩と和歌の書写態度や校訂には差が見られる。和歌の書写には漢詩ほど注意が払われていないことの表れであろう。

次に、和歌の本文異同についても見ておきたい。

上巻・春部・三月三日付桃・四四番歌の場合、第五句に本文の揺れが見られる。⁽³⁾

みちとせになるといふも、のことしより

はなさくはるにあひそめにけり

「あひそめにけり」↓「あひそめにける」逸成

↓「あひそしにける」寂然・生

↓「あふそうれしき」戊・長・東経・逸能・京能・東永・

歴覚・兼・恕・書天

↓「あひにけるかな」公・山・久・貞・建・鳳・逸秀・正・

嵯・浄・忠・輝・後・東超・龍・通・東文・書室・遠・

史尊・逸親・紹・重・宗

↓「なりにけるかな」書為・伏

この歌は『拾遺集』『拾遺抄』に見られる歌である。『拾遺集』（天福本）では作者を「みつね」とし、『拾遺抄』では「よみ人知らず」、「古今和歌六帖」は「忠岑」とする。

第五句は、『拾遺集』（天福本）「あひにけるかな」、「拾遺集」（異本系統『拾遺抄』流布本、貞和本、書陵部四五〇・一一本）「あひそしにける」、「拾遺抄」（書陵部五〇三・二四三本）「あひそめにけり」とある。また、『忠岑集』『是則集』の他、『俊頼髓脳』『和歌童蒙抄』などの歌論書にも同じ歌があり、初句と結句に異同が見られる

『和漢朗詠集』諸本での本文の揺れは、このような他本での揺れを反映したものと思われる。しかし、この異同は本文の系統や他本で校合した結果というよりは、書き出しの初句だけを見てあとは記憶にある形で書いた結果のように思われる。他の作品では結句だけでなく初句も「みちとせに」と「みちよへて」の異同があるのに対し、『和漢朗詠集』諸本では、寂然本のみが「みちよへて」とある以外、調査した範囲の諸本ではすべて

「みちとせに」とする。

もう一例、下巻・禁中五二六番歌の例を見てみたい。異同は主なもののみを掲出する。

みかきもるゑしのたくひにあらねとも

われもこゝろのうちにこそおもへ

「ゑしのたくひに」（粘・近・伊・久・逸房・後・史尊・恕）

↓「ゑしのたくひには」重

↓「そのたくひには」（その他諸本）

「あらねとも」↓「あらねは」東文

「われも」↓「我は」公

「うちにこそおもへ」（粘・近・伊・恕）

↓「うちはおえつゝ」久

↓「うちにみえたり」関尹

↓「うちにこそあれ」東経

↓「うちにこそすめ」書室・遠

↓「うちにこそまで」（生）・書天

↓「なかにこそたけ」関・雲・公・葦・戊・逸成・冷・通

↓「うちにこそたけ」（その他諸本）

この歌は、出典未詳歌で他には見えないものである。この歌でも、第三句と結句に大きな異同が見られるが、系統による異

同とは考え難い。

以上見てきた通り、和歌は行間を詰めて書写されること、本文に問題があっても訂正されないことが多いこと、歌本文に異同が多く、正確には書写されていない可能性があることが指摘できる。漢詩に対して和歌がそれほど重要視されなくなる傾向が見て取れるだろう。

『和漢朗詠集』諸本が卷子本として書写されていく背景には、調度品としての意味の他、注釈書としての意味、漢籍に準じた扱いであった可能性などが考えられる。

四、おわりに

『和漢朗詠集』の写本は、成立以後数多く書写されてきたが、書写目的はさまざまであり、ただあるものを書き写すだけではなく、調度品として文字の鑑賞、本文研究・訓読の勉強など、時代に合わせて様々に書写されてきた。卷子本はそのさまざまな目的に合った都合のよい装丁であったと考えられる。

また、和歌については漢詩に比べてやや軽んじられる傾向が見られるが、和歌を省略して漢詩文句だけを書写した写本はほとんど見られない。文字の鑑賞という意味では漢字と仮名、漢

詩と和歌の取り合わせは重要であるが、鑑賞のために書かれたのではない写本でも和歌は書写されている。本稿でも少し触れたが、平安書写の公任筆本などでは和歌を草仮名や万葉仮名、宣命書風にするものも見られる。このような和歌の書写のあり方については今後考えていきたい。

付記：本研究は、JSPS 科研費 JP 16K02382 の助成を受けたものであり、二〇一八年和漢比較文学会第一一回特別例会（台湾・国立台湾大学）において発表した内容に基づきます。会の席上、さまざまなご指摘をいただいた先生方に御礼申し上げます。

〔注〕

（１） 諸本の調査は国文学研究資料館の共同研究（若手）の『和漢朗詠集』の伝本と本文享受の研究」の研究成果に依る。諸本の詳細は研究成果報告を参照。

（２） 國學院大學図書館デジタルライブラリー

「懐旧」

<https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/digilib/wakanrouei3512-3513-2/mag3/pages/page054.html>

「老人」

<https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/wakanrouei3512-3513-2/mag3/pages/page052.html>

(3) 初句、第三句にも異同は見られるが掲出は省略した。

(えさか ゆきこ／京都精華大学特任講師)